

心理学の発展と海外編〈2007〉

～T教授の観察ノートから～

2008.11.15

タツノオトシゴ



T教授の研究室には色々なメンバーが出入りしています。実は今回登場する<hidehiko>も変り種の留学生の一人です。ときどき、思い出したように研修に参加するのですが・・・

さて、見知らぬ国からの二人の来訪者、<rinsan>と<shibasan>はS婦人のクッキーに誘われ、不躰な質問にも心を開いているようです。当時のドイツは、医学では先進的な研究をしており、同時に心理学分野でも科学的な実験法を採用した近代心理学の確立者としてヴィルヘルム・ヴント(Wilhelm Wundt, 1832-1920)の名がよく知られています。

1879年にライプチヒ大学に初めての心理実験室を開設した事績によってヴントは、科学的研究に基づく実験心理学の父と呼ばれます。(実はT教授とは懇意の仲です)

さて、前回の健さんとT教授の会話でこんな場面がありました。

T教授:「ところで、健さんはギリシャ神話に興味を持っているようだが、どんな所を研究してみたいのかね？」

健さん:「今は、スフィンクスの謎について、関係資料を調べているところです」
「例の、オイディプスの謎解きに関する辺りが面白くて…」

健さんの中にアドラー的側面を見出したT教授、C.G.ユングやA.アドラーがS.フロイトとの共同研究において臨床心理学の学問分野を打ち立てた後にS.フロイトから離れていくことを予感しているようです。C.G.ユングが心の深層に関心を持ったのに対して、A.アドラーは人と人との関係に関心を持ち、人間関係はどうしてもつれるか、どうすればいい人間関係がもてるかについて、多くの研究を残しています。S.フロイトとA.アドラーの意見対立原因となったのが「オイディプスコンプレックス」ですが、少し詳しく説明しておく事にします(^^;

健さんにはウィーンのS.フロイトに宛てて紹介状を書いておこう。(T教授の日記より)



オイディプス（エディプス）コンプレックスとは母親を確保しようと強い感情を抱き、父親に対して強い対抗心を抱く心理状態の事をいいます。これに関する理論はフロイトが提唱したものであり、その主張は以下の通りです。（以下 HP からの引用です）

自我発達の途中の段階において男児の自我は、もっとも身近な存在である母親を自己のものにしようとする欲望を抱く。同時に、その母親が受け入れている父親の存在に気づき、自己を父親に同一化させる。しかし、自我の発達が更に進展すると、男児の自我は、母親の所有において、父親は競争相手あるいは敵であるという認識を抱く。このようにして、父親と同一化した自我と、父親を敵視する自我の二つの位相が生まれ、自我は葛藤に直面する。この際父親に去勢されるのではないかという不安から、近親相姦的欲望は抑制され、自我は葛藤を脱する。

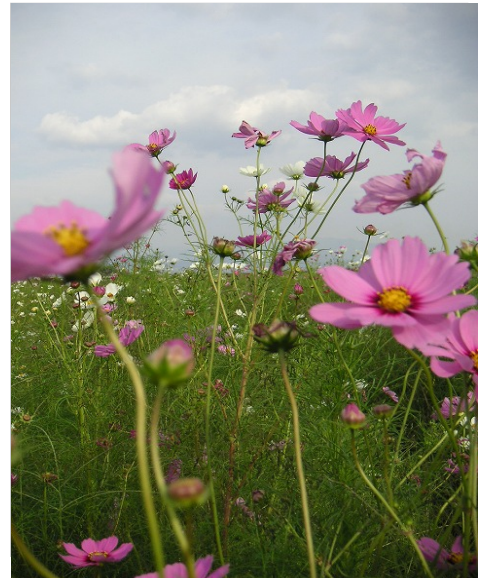
そしてその結果としてかつて父親に同一化していた自我の成分を無意識下に置き「自我の理想形」すなわち「超自我」とすることで、男児の心理は発達するとされる。超自我は、父親の規範としての像を維持し、「なんじなすべし」または「なんじなすべからず」という定言命法（カント）を発する。これは道徳規範である自我理想、つまり超自我の成立とその発展を通じて、自我はより高い道徳規範を志向するようになる。この理論の中に見られる母親に対する近親相姦的欲望をフロイトは、ギリシア悲劇の一つ『オイディプス』（エディプス王）になぞらえ、エディプスコンプレックスと呼んだ（『オイディプス』は、知らなかったとは言え、父王を殺し自分の母親と結婚したという物語である）。

これに対し、女兒の自我発達の場合は、初めは母親に愛情を抱くが、自分にペニスがない事にショックを受けその後同様の現象が起こるのだという。その後乳房の膨らみなどの性徴により去勢感を払拭し女性としての誇り、自我に目覚める。



しかしその女性器の元来的喪失感は埋め難く、男根による補償満足を求めることが女性の性欲となり、特に男児誕生はこの喪失感を全面的に補償すると考えられるのです。

なお、フロイト自身は「複合 (Complex)」という言葉は使わず、「コンプレックス (複合)」はユングの用語であり明確で理解し易いため、それ自身がトートロジーのようなフロイトの用語法を、弟子達が継承せず、勝手に「エディプス複合」と称したのです。フロイトは弟子達に最後まで、「複合という言葉は間違っている」と批判しましたが、精神分析では意図に反して「エディプス複合」が正式な名称となっています。エディプスコンプレックスには批判も多く、有名なものとしては「それは外向的な人間に限ったもので内向的な人間においては、それに限らない」という C.G ユングの批判があります。



実際、エディプスコンプレックス理論は父性的な社会である西欧ではよく利用される理論ですが、母性的な社会である日本ではさほど感覚的に合いませんでした。そのため阿闍世コンプレックス理論が日本では提唱される状態となったのです。ただ、これに関しては家父長制が強すぎるためエディプスコンプレックスが見えなくなっているという反論や、阿闍世も実際は母親ではなく父王への反抗心だったという指摘もあるため、正しいのかは分かりません。

また、エディプスコンプレックスは父親が強い事が前提であり、ブロンスワフ・マリノフスキの「母権性社会」の話はこういった事の反証として用いられます。また、フロイトが強い近親相姦の欲望は多くの人にあるとしたのは、紀元前 4 世紀に書かれたソフォクレスの劇作「オイディプス王」の 981 行目に「多くの人がすでに夢の中で母と枕を交わしている」というイオカステのセリフがあるからのみであり、実際には近親相姦の欲望はそれほど強くないとも言われています。さらに、エディプスの物語の過程が近親相姦を煽るように「一度引き離す」ように出来ていた事からも批判があります。つまりエドワード・ウェスターマークの身近な相手に性的欲望を持つ事は少ないというウェスターマーク効果によって近親相姦願望は近くにずっといた場合起こらないというが、これはそれにぴったり合う場合であって、通常はこんな事は起こらないと論証するためです。なおミシェル・フーコー(1954)はリビドーなどという概念は神話すれすれとして批判しています。また、ドゥルーズ=ガタリ『アンチ・オイディプス』(1972)には「禁止されている、だから望んでいる」というのはダブル・バインド的で非生産的であり、本質的に生産的なものは「器官なき身体」と述べています。『アンチ・オイディプス』ではエディプスコンプレックスを含んだ精神分析の考え方全体を徹底的に批判しているのです。

長々となりましたが、此処まで調べておかないと全体像が理解しにくいと思います。

19世紀の末、都会の喧騒を離れたこの場所にも、色々な情報が伝わってきます。世界中が何か得体の知れない不安に駆られ、未知の世界への憧れや探求が始まるのもこの時期の特徴です。既存の価値観が通用しなくなり、新しい力が求められているようです。今回は、<hidehiko>さんに関連する部分を下記に拾い出しておきました。

1876年 コッホ：炭素菌を発見

A. G. ベル：化学的方式の送話器を用いて初めて完全な文を電話で送る

1878年 T. A. エディソン：白熱電球を発明し、「エディソン電燈会社」を設立

1882年 コッホ：結核菌を発見

1884年 ケッペン：世界気候を6型11区分に分類

1887年 9月15日～T教授の研究室メンバーが心理学セミナーで2週間の合宿

1889年 プランク：「エネルギー保存の法則」

1990年 コッホ：ツベルクリンを発明、ベーリング、<shibasan>：血清療法に成功

この夢シリーズはNo44からスタートし、現実の世界で2年半も経っているのですね（^^;

1890年代は細菌学の黄金時代と良く言われます。それは、病気は悪い空気によって起こると考えられたが、ドイツ人のローベルト・コッホによって病気は肉眼では見る事の出来ない微細な生き物によることが証明され、探せば必ず病気の原因である細菌が見つかり、多くの学者により多種類の病原細菌が相次いで発見された時代でした。



1885年から1886年にかけて、T大学の<hidehiko>が「脚気の病原細菌を発見」と発表したことから脚気の原因についての騒動が始まったのです。

<hidehiko>は<shibasan>とは同郷人でK医学校では同じマンスフェルトからオランダ医学を学んだか一歳年下でしたが、<hidehiko>より遅れて東京のT大学を卒業した<shibasan>に細菌学の基礎技術を教えた先生でもあります。脚気菌発見のニュースはドイツにも伝えられ、ローベルト・コッホの第二の高弟であり<hidehiko>の師でもあるレフレルが、コッホ研究所にいた<shibasan>に対して「科学では、たとえ恩師の説であっても誤りは指摘しなければならない」と諭したので、<shibasan>は細菌学者として黙認できないと<hidehiko>の説を批判する論文を発表したのです。

「舞姫」などの文学作品を発表して高い評価を受けていた<rinsan>は、T大医学部卒業の陸軍軍医で<hidehiko>を批判した<shibasan>を感情的に激しく非難する論文を発表しました。それに対して<shibasan>もすぐさま反論し、「<rinsan>の説によれば<shibasan>は知識を重んじるあまり人の情を忘れたとの事であるが、私は情を忘れたのではなく私情を抑えたのであると…。学問に疎い者が学問を人情とすり替えて誤魔化すのは如何かと思う」と決め付けた訳です。

北里柴三郎. <shibasan>

最終身分はドイツ国のプロフェッサー・北里研究所所長・男爵。

1871年熊本医学校に入学、マンスフェルトに師事してドイツ語でオランダ医学を学ぶ。1875年東京大学医学部に入学し（入学の上限が19歳であったので年を4歳若く記載）、1883年に卒業（第五期生）。1885年にドイツ留学しローベルト・コッホに師事する。

1889年に世界で最初に「破傷風菌の培養に成功」し、1891年帝国大学推薦で医学博士の学位を授与される。1892年にドイツより帰国した。当時、日本政府と東京大学派は、<shibasan>に職を与えなかったがこれに屈せず帰国直後より関係者の支援を得て精力的に研究を進め、10月17日、日本橋衛生協会主催大演説会での脚気論争では<hidehiko>の細菌感染説を採る<rinsan>に対して、栄養素の不足（白米飯を食すると発症し、麦飯またはパンを食すると脚気が無くなる。）を原因とする医学博士高木兼寛の説を支持。11月7日、大阪私立衛生会では赤痢研究をめぐって、<hidehiko>と再び対立した。

しかし、研究上の対立とは別に、私生活では<hidehiko>と<shibasan>の交流は終生続き、<hidehiko>の葬儀では<shibasan>が弔辞を奉読した。<hidehiko>は生来温厚な人であったという。1892年暮れに福沢諭吉と森村市左衛門により私立伝染病研究所を設立して貰う。1894年香港で大流行したペストを研究してペスト菌発見し7月31日帰国したその翌日、8月1日に日清戦争が始まった。1849年熊本に生まれ、1931年に80歳で死去。

森林太郎<rinsan>

最終身分は陸軍軍医総監（文豪）。

1874年第一大学医学校（1877年東京大学医学部と改称）予科に12歳（入学は14歳以上と定められていたので1860年生まれと2歳若く記載）で入学、1876年東京医学校本科に進学、1881年東京大学医学部を19歳で卒業（第三期生）。1884年に陸軍からドイツに留学し、ペッテンコーフェールから衛生学を学び1888年に帰国し、陸軍軍医学校教官となる。1890年「舞姫」を発表し文学者としての地位を確立す。1891年帝国大学推薦で<shibasan>と一緒に医学博士となる。1907年陸軍軍医総監と陸軍省医務局長となり、陸軍軍医の頂点に立つ。ドイツ医学の信奉者で脚気が食事によることを生涯認めなかった。日清・日露戦争で陸軍が25万人もの脚気の出した責任者の一人。1862年津和野藩（島根県）に生まれ、1922年に61歳で死去。

さて、今回はキョンシーの世界を覗く事になるのでしょうか（^^）



<みんなで仲良く日向ぼっこ>